余市町でおこったこんな話

余市町の埋もれた歴史等を紹介し、改めて余市町を再認識するコーナーです。

～その246～『ヒゲのおじさん　キング・オブ・ブレンダーズ』

ススキノ交差点の角（札幌市中央区南４条西３丁目）、ビルの壁面にニッカウヰスキーの「ヒゲのおじさん」の巨大広告があります。昭和４４（１９６９）年１２月から設置されているススキノの象徴といえる広告看板で、若者の投稿なのか、ＳＮＳでは「ススキノの守り神」と言われているのを見かけたことがあります。

ヒゲのおじさんの名前は「キング・オブ・ブレンダーズ」。トランプのキングと似ている感じがありますが、温かい青い瞳で、片手に大麦の穂を持ち、鼻に小さなグラスを近づけて、ブレンドのための原酒をテイスティングしています。

このデザインがラベルに描かれたウイスキーが登場したのは昭和４０年９月、カフェ式グレーンスピリッツをブレンドした日本で初めてのウイスキー「ブラックニッカ」でした。「ブラックニッカ」は、ヒゲのウイスキーとも呼ばれ、それまでにないソフトウイスキーとして人気が爆発し、ブームの火付け役となりました。

ヒゲのおじさんのモデルはW・P・ローリーといういくつもの香りを嗅ぎ分けるウイスキーのブレンドの名人という説があります。

デザインはグラフィックデザイナーの大髙重治（おおたかしげじ）さん。大髙さんは明治４１（１９０８）年、東京都内で生まれ、親戚が経営する千代田区神田の印刷会社、三陽堂図案房に丁稚として働き始めました。

昭和１０年頃、勤めていた会社に大日本果汁株式会社からリンゴジュースのラベルの図案制作の依頼が入ったのがきっかけで、同社の担当になりました（ラベルに描かれたリンゴの中央にはＮｉｋｋａのロゴがすでに入っています）。

大髙さんが手がけたデザインは竹鶴さんに認められ、その後、ニッカの仕事を一貫して手がけることになりました（「大髙重治　手書きのデザイン展」平成２６（２０１４）年　東京国立市のギャラリー明窓浄机館の企画展より）。

大髙さんがデザインしたキング・オブ・ブレンダーズの原画が、ニッカウヰスキー余市蒸溜所の博物館に展示されています。企画当初に検討用として描かれたデザインは、細かなモザイク状のもので、王様は正面を向いています。

「曲線に直線的なアルファベットは違和感がある」と考えた大髙さんは、ラベルの文字もビンの曲線に合わせて手書きでデザインし、ビンとラベルの一体感を表現したそうです。

ブラックニッカは日本ではじめて、カフェ式連続式蒸留機で作られたグレーンスピリッツ（穀類を原料にする蒸留酒）をブレンドしたウイスキーとして発売されました。余市工場でそれまで作っていたモルトウイスキーと、昭和３９年から兵庫県の西宮工場（当時）で作りはじめたグレーンスピリッツをブレンドして出来た新しい飲み口のウイスキーでした。

余市で蒸留していたウイスキーに自信を持っていた竹鶴さんは、自らが作ったグレーンスピリッツをブレンドするウイスキーを夢見ていました。それは本場のスコッチウイスキーに勝つためでした。

資金援助者からも「余市でポットスチルは完成しているが、カフェ式グレーンをまぜないと本格的な香りが出ない。これをやらなければ、スコッチに負けてしまうよ。」と言われたことを竹鶴さんは書き残しています。

モルトとグレーンをブレンドした念願のウイスキー、スコッチに勝てるウイスキーを手に入れた竹鶴は「まさにウイスキーの品質革命といえるもの」と喜びを口にしています。

日本を代表するブレンデッドウイスキーを象徴するキャラクターは、ニッカウヰスキーの顔として今夜もススキノ交差点で光っています。

キング・オブ・ブレンダーズ ▶

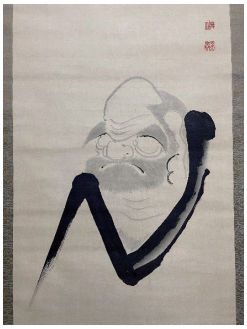
博物館文化財ニュース

問合せ　博物館　☎２２－６１８７
※１２月１６日から冬期休館中

～新規収蔵資料紹介　東開和尚筆『達磨絵』～

新たに永全寺住職第五世・澤邊東開（さわべとうかい）和尚の筆による達磨絵一幅が収蔵品に加わりました！

東開和尚は弘化４（１８４７）年に江戸で生まれ、明治４（１８７１）年より永全寺（富沢町２丁目２１番地）の住職となり、布教に励む一方で、百寿園五亀、五亀の雅号で達磨絵などの優れた作品を残しました。

新潟県柏崎出身の達磨画家・山田東洋（やまだとうよう）は、東開和尚のもとを訪れた際に、その作品に感銘を受け、自身も油彩による達磨絵の制作に挑むようになりました。その作品は「東洋達磨」と称されるなど、東開和尚の達磨絵は他の作家にも影響をあたえました。

現在、東開和尚の達磨絵は、永全寺所蔵のものが「東開和尚筆達磨絵」として昭和５６（１９８１）年に町の文化財に指定されています。